

2021年6月19日  
担当 岡部

山口西田読書会（第276回）

2021年6月12日（第275回）のプロトコル（15人がリモート参加）

旧全集 第4巻「場所」の「一」より

#### 【6/12の哲学的問い】

第3段落の論点「意識する意識とはなにか？」がそのまま「哲学的問い」として再提出された。議論は「かかる意識の野を意識する意識の野はその極限に於いても、之を超越することはできない」の一文に集中し、考えられた意識の野を意識する「意識の野」を直観と見るか反省と見るかが問題になった。

#### 【テキスト】

第4段落（pp. 212-213）を読了した。

第1段落においてラスクを念頭に置きながら、「移りゆく認識作用」とこれを「超越する対象」の対立、対象と対象の関係からなる体系を論じ、その体系を維持成立させる何かがあるとされる。第2段落は大部分がその説明で、第3段落においてその何かは「意識の野」とされた。

第4段落ではすこし視点が変わり、形式が質料を統一する背後に主観の構成作用が働いており、形式は主観に具わっているとの記述から始まる（意識の野の話ではなかったのかとの疑問の声あり。記述の念頭にある学説がエミール・ラスクか、ラスク以外の新カント学派かも問題になった）。さらに形式と質料の対立とは異なった「意味の対立」（主観と客観の対立）があり、その場所は別にあると述べられている。形式と質料の組み合わせは自由で、主観性は外から加わるとある（それによって「判断領域」が成立する）。

そこでラスクが「体験」として捉えようとした包括的な領域が紹介されて、その体験にもまた「体験の場所」があると書かれている。これ以降、話は「認識する」ことに還り、ラスクの話に沿ったものから一転して西田の主張に移る。「自己の中に無限に自己を映し行くもの、自己自身は無にして無限の有を含むものが、真の我として之に於いて所謂主客の対立が成立する」「同といふこともできない、異といふこともできない、有とも無とも云えない」「論理形式によって限定することのできない」「真の形式の形式」のように論が一気に加速し、個々に説明されてきた「場所」が総合される。このあたりは通読にとどまっており、「真の体験は全き無の立場でなければならぬ」にいたっては、どこか別のところからきた言葉のように思える。

アリストテレスの「デ・アニマ」で精神を「形相の場所」としているとの記述は、次回に確認することになった。

#### 【きょうの哲学的問い】

場所は（時間的に）移りゆくものか、変わらないものか。それはなぜか。